

イザヤ書 60 章の時代、イスラエルの人々は、半世紀にわたるバビロニア帝国の捕囚からようやく解放され、故郷への帰還が許されました。しかし、故郷は荒れ果て、政治的独立も叶わず、新たな辛い日々が始まったただけでした。まさに、預言者イザヤが「見よ、闇が地を覆い、暗黒が国々を包んでいる」と告げているような有様だったのです。それでもイザヤは、「しかし、あなたを照らす光は昇り…主の栄光があなたの上に現れる」と続けます。目の前に映る現実からは、とても希望の光など見通せるものではありません。けれども、そんな時だからこそイザヤは、「前」から「上」に視線を向け、上から私達を照らし出す神の光に着目させようとするのでした。

精神科医ヴィクトール・フランクルが記した『夜と霧』という名著があります。フランクルは、第二次大戦中、ナチスによって強制収容所に送られ、妻と家族、そして多くの同胞の命を奪われていきました。強制収容所は、助かる見込みのない、まさに「絶望」という言葉がそのまま当てはまる場所であり、多くの人が生ける屍のようになっていきました。しかし一方で、人間らしい感情や前向きな考え方を失わず、エネルギーを保ち続ける人もいたことをフランクルは報告しています。その違いは、それでも「生きることの意味」を見出せるかどうかにあったと言います。彼は、強制収容所の絶望的状况のなかで、「人は相当の苦難にも耐えられるけれども、無意味には耐えられられない」ことを痛感しました。その上で、「人間が人生の意味は何かを問う（強制収容所の状況下では、この考え方は無力だったようです）前に、人生のほう人間に問いを発してきている」のであり、それに答えて生きようとするところに生きる意味があるのだという視点の転換を促されていきます。

「闇が地を覆い、暗黒が国々を包んでいる」現実を前にしてなお、「起きよ、光を放て」とイザヤは告げました。それは、あなたの上に輝く「主があなたの永遠の光」（20 節）となって導いていることを知っていたからです。主イエスは、十字架によって処刑される前夜、目の前の現実にはひどく恐れもだえながらも、その心の眼差しを「上に（神に）」向け、「しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」（マルコ 14:36）と祈り、ご自分の苦難の意味を受けとめていかれました。そして、聖書は、この主イエスの言葉と生き方を通して、「上（神）から」求められていることを知ることができ、それに応えて生きていこうとする人生の意味が既に私達の足元には送り届けられていることを示してくれています。「主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆きの日々は終わる」（20 節）。

（文責：望月達朗牧師）

